

プロト・ユーラシアンとしての「ネイティブ・アメリカン」

山本 明歩

要 旨

ネイティブ・アメリカンは自然と共に生きる人々というイメージが流布しているし、ネイティブ・アメリカン自身がこのようなイメージを利用することもあるが、そのイメージの正当性については様々な議論が繰り返されてきた。本稿ではホモ・サピエンスが脱アフリカを果たした後、ネアンデルタール人やデニソワ人などと混血して形成された民族集団をプロト・ユーラシアンと定義し、このプロト・ユーラシアンに見られる行動パターン通过分析を通じて、ネイティブ・アメリカンについても検討していく。プロト・ユーラシアンはヨーロッパ、アジア、オーストラリアなどの諸大陸へ拡散していく過程で大型哺乳類の絶滅に関与したと考えられ、南北アメリカもこの例外ではない。

キーワード：ネイティブ・アメリカン、環境、狩猟採集社会

1. 序論

16世紀から17世紀にかけて新大陸で生じた様々な出来事について、これまで多様な解釈が試みられてきた。最も初期の文献の一つであるラス・カサスの『インディアスの破壊についての簡潔な報告』には次のような文章が見られる。

神はすべての民族の中で、このインディアス一帯に住む無数の人々をことごとく、この上なく素朴で、悪意や二心をもたない民として、また、極めて恭順で、もともと従ってきた土着の首長にも、また今現在仕えているキリスト教徒にも実に忠実な民として創造された。彼らは世界中のどの民族よりも謙虚で辛抱強く、また、温厚でおとなしく、諍いや騒動を好まない。(Las Casas, 1552, p. 28)

そこには純真無垢でキリスト教への教化を待つばかりの存在として「ネイティブ・アメリカ

ン」¹が描かれている。これに対して、ラス・カサスの論敵であったセプールベタが描き出す現地住民像は、野蛮で人間とはみなしがたい野生児そのものといったところであろう。同じ時代を生きた二人であるが、「ネイティブ・アメリカン」に対する見方は非常に対照的である。しかし、これらの見方に共通していることが一つある。それは、「ヨーロッパ」対「アメリカ」であり、そしてまた、「文明」対「未開」という対比の中で「ネイティブ・アメリカン」をとらえていることである。

ラス・カサスが征服者側の立場に立ちながらも「ネイティブ・アメリカン」を擁護したこと、そしてスペイン王家がその報告に基づいてインディアス新法を制定したことは特筆に値する。しかし、それはあくまでも人と人との対等な関係性を保障するものではなく、「ネイティブ・アメリカン」に対するコンキスタドール（征服者）の目に余る非道や残虐行為の正当性を問うものであった。

この二つの見方はその後様々な形を変えなが

ら、「高貴なる野蛮人」と「荒々しい未開人」という二つの見方として浸透し、今日でも『ダンス・ウィズ・ウルブス』と『駆馬車』という、「ネイティブ・アメリカン」が登場する二つの映画に見出だされると鎌田（2009）は主張している。特に前者の見方は環境意識の高まりとともに、「環境にやさしい、環境とともに生きる存在」としての「ネイティブ・アメリカン」像へと結びついているように思われるのである。

しかしながら、「荒々しい未開人」は言うまでもなく、「高貴なる野蛮人」もまた「ネイティブ・アメリカン」の姿をあるがままに描き出しているとは考えにくく、むしろ「ネイティブ・アメリカン」もまた、様々な人々や社会と関わり合いながら激動の時代を駆けぬけてきた一群の人々であったと言えるのではないだろうか。その意味では、「高貴なる野蛮人」も「野蛮な未開人」も「ネイティブ・アメリカン」をひとくくりにして西洋社会のイメージを押し付けたステレオタイプに過ぎないという点では、何ら変わるところがない。そして、このような「イメージの押しつけ」は今日でも続いており、「ネイティブ・アメリカン」が自然環境の守護神であるかのようなイメージが流布している。

「ネイティブ・アメリカン」の位置づけに関する問題は、様々な観点から論じられているが、本稿では「ネイティブ・アメリカン」を含む人類集団としてプロト・ユーラシアンという概念を提起し、「ネイティブ・アメリカン」がプロト・ユーラシアンとして典型的ともいえる環境利用を行っていたという議論を通じてこの問題にアプローチしてゆく。そして、「ネイティブ・アメリカン」やその祖としてのパレオ・インディアンが、プロト・ユーラシアン一派として新大陸に進出した後、どのような形で環境と関わっていたのかを議論する中で、果たして彼らが環境親和性の高い「特殊な人々」であったのかどうかを検討していく。

2. プロト・ユーラシアンの定義

今日、地球上には70億を越える人々が居住しているが、生物学的にはこれら70億の人々が単一の種、ホモ・サピエンスに属していると考え

られている。言うまでもないが、「ネイティブ・アメリカン」もまた、ホモ・サピエンスに属する一群の人々である。ホモ・サピエンスがどのように発達し、そしてどのように世界各地に拡散していったのかについては様々な議論が続いている。

一例を挙げるのであれば、海部は現生人類のアジア拡散が沿岸部を中心に行われたとする説に異を唱えている²。DNA分析など新たな研究方法を導入して研究が大幅に進展しているとはいえ、限られた情報の中から描き出される人類進化の図式には未だに不明瞭な点が極めて多いというのが実情であると言えるだろう。しかしながら、いくつかの点については研究者の間で共通の認識が形成されてきていると言えるだろう。

まず、ホモ・サピエンスはアフリカで誕生したのであり、それ以外の地域にはそれ以前に居住していたネアンデルタール人やデニソワ人などを駆逐、あるいは吸収する形で侵入していったことが挙げられる。

近年の遺伝子解析によって、いわゆるサブ・サハラに居住する人々を除く諸民族にネアンデルタール人の遺伝子の痕跡が受け継がれていることが示された（Green et al. 2010）。これはつまり、脱アフリカを果たしたホモ・サピエンスの集団が分化する前、おそらく非常に初期の段階でネアンデルタール人と混血したことを示していると考えられる。よって、このようにして形成された集団を、本稿では「プロト・ユーラシアン」と呼ぶことにする。

プロト・ユーラシアンはホモ・サピエンスに含まれるため、その下位概念となるが、本稿では特に、プロト・ユーラシアン形成以前のホモ・サピエンスとプロト・ユーラシアンを分けて議論する。現生人類においてもヨーロッパやアジアなどプロト・ユーラシアンの子孫を構成する遺伝子のほとんどは、ホモ・サピエンス由来であるため、これを包括的に「ホモ・サピエンス」として扱うこと自体は正当であると言えるし、本稿ではプロト・ユーラシアンに含まれないホモ・サピエンスを区別したり差別したりする意図は全くないことにも言及しておきたい。しか

しながら、長年アフリカ大陸に束縛されていたホモ・サピエンスはプロト・ユーラシアン形成後に寒冷地への適応性を高めたと考えられ、爆発的に世界各地へと拡散していったこと、そしてその後、各地でヨーロッパの後期旧石器文化に該当する諸文化を形成し、そしてついには農耕へ至ったことは事実であり、プロト・ユーラシアン形成がホモ・サピエンス史上極めて大きな影響を及ぼした出来事であったことは否定できないだろう。

さて、10万年前以降プロト・ユーラシアンが形成され、ユーラシア大陸、オーストラリア大陸、南北アメリカ大陸など様々な地域に拡散していく。この時代のものとされる様々な人骨、すなわち、ヨーロッパに見られるいわゆるクロマニオン人や沖縄の港川フィッシャー遺跡から発見された人骨、マレーシアのグヌン・ルンツ洞窟の人骨などはプロト・ユーラシアンであったと考えられる。

10万年前以降に見られる遺跡のうち、ホモ・サピエンスのものではないものとして、最も良く知られているのはネアンデルタール人によるものである。ネアンデルタール人はヨーロッパから中東にかけての広い範囲に分布し、末期にはシャテルペロン文化のように後期旧石器文化の特徴を持つに至ったことが知られている。その他に最近知られるようになった化石人類として、デニソワ人とホモ・フロレシエンシスが挙げられる。これらの人々はプロト・ユーラシアンと接触後、比較的短期間のうちに絶滅³している。この中で最も原始的であると考えられるのはホモ・フロレシエンシスであるが、これはアフリカに2百万年ほど前に暮らしていた末期型のアウトロピテクスか、ホモ・ハビリス、あるいは初期のホモ・エレクトゥスに近いと考えられており、1万数千年ほど前に絶滅したとされている。比較的原始的であると考えられるフロレシエンシスが地質学的にはごく最近の時期まで生存していたということは、これらの人類の絶滅原因が純粹に自然環境によるものではなく、そこにプロト・ユーラシアンが何らかの形で関わっていた可能性があることを示唆していると言えるだろう。

プロト・ユーラシアンが誕生したのは、おそらく5～6万年前の中東であると考えられる(Fu et al. 2014, Callaway 2015)が、ミトコンドリアDNAの解析によって一度は否定されたホモ・サピエンスとネアンデルタール人の混血が再び肯定的に見られるようになった背景には、技術の進歩により、より複雑な細胞核のDNAが解析できるようになったこと、そしてその結果、現生人類のミトコンドリアには認められなかったネアンデルタール人の痕跡が核DNAには認められたことが挙げられる。このことはつまり、プロト・ユーラシアンにネアンデルタール人の遺伝子が与えた影響が父系のラインで受け継がれた可能性が高いということが考えられる。

ミトコンドリアが母系ラインで子孫に伝えられることを考慮するならば、当時生じた現象には二通りの解釈が可能である。一つはネアンデルタール人由来のミトコンドリアがプロト・ユーラシアンの中で絶えた(つまり当初はプロト・ユーラシアンにネアンデルタール人由来のミトコンドリアが受け継がれていた)というものであり、もう一つは、そもそもプロト・ユーラシアンがネアンデルタール人の父とホモ・サピエンスの母をもつ子供の子孫として形成された(当初からネアンデルタール人由来のミトコンドリアはプロト・ユーラシアンに受け継がれなかった)という可能性である。実際にどちらが生じたのかは未だ結論づけることはできない。しかし、プロト・ユーラシアンは比較的少数の人々を祖として形成されてきたと考えられている(Neves 2012, Currat and Excoffier 2004)。

プロト・ユーラシアンはその後の拡散と共に、分岐や統合を繰り返しながら、今日知られるアジア、ヨーロッパ、オセアニア、南北アメリカの諸民族を構成していったと考えられる。

3. プロト・ユーラシアンとネアンデルタール人の比較

次に、プロト・ユーラシアンがどのように環境と関わっていたかという点にスポットを当てるため、両者の行動パターンがどのように異なっていたのかという点について考察を進めてい

く。プロト・ユーラシアンとネアンデルタール人の居住域がほぼ重なり合ったなかで、比較的研究が進んでいるのは中期旧石器時代から後期旧石器時代にかけての中東からヨーロッパにまでの地域である。この時代にはネアンデルタール人の分布域が徐々に狭められていき、かわりにプロト・ユーラシアン の遺跡が拡散していく。このプロト・ユーラシアン の一派はクロマニヨン人として知られており、ここで比較する対象は主としてクロマニヨン人とイベリア半島などヨーロッパ各地に見られたネアンデルタール人である。

プロト・ユーラシアンとネアンデルタール人についての比較研究は多い。プロト・ユーラシアンはネアンデルタール人と比較して分業が進んでいたと考えられるし、より大きな集団サイズで暮らしていたことも知られている (Conard 2011)。しかし、本稿で特に取りあげたい点は、プロト・ユーラシアンと比較してネアンデルタール人がより定住性の高い生活を営んでいたという点である。

リーバーマン (Lieberman 1993) によれば、中近東のネアンデルタール人はレディエーティング (radiating) と呼ばれる移住パターンをとっていた。これは地域的な移住があるものの、ある特定の季節に同じ地域に戻るような移住パターンである。

プロト・ユーラシアンにもレディエーティング・パターンは見られるが、時期としてはずっと後になり、その例としては1万5千年ほど前以降のレヴァント地域に見られるナトゥーフ文化が挙げられる。ナトゥーフ文化では定住性の高い居住地や臼のような持ち運びに適しない道具類が見られるようになり、野生のムギへの依存度が高かったと考えられる。しかし動物性タンパク質はガゼルを中心とした狩猟に頼っていた。同様に、1万年前以降の世界各地で見られた定住社会でもレディエーティング・パターンの移動が見られた (Lieberman 1993)。この時期には気候が安定化し、徐々に人口が増えるとともに、人類が狩猟や採集活動への依存度を減らし、農耕への依存度を増していった (山本 2004, 山本2005)。

レディエーティング方式では、一般に環境への圧力が高まり、食料となる動植物が減少するため、狩猟採集活動により多くのコストがかかるとされている (Lieberman 1993)。つまり、何らかの形で狩猟採集社会が環境変化への対応を迫られるのである。一般的には別の地域への移住が考えられるが、狩猟から漁労へと生業の主軸を移したり、農耕や牧畜を始めたりする場合もある。一例として、新石器時代のレヴァント地域では、PPNA から PPNB にかけて農耕への依存度が高まるにつれ、より遠くへと狩猟に出かける必要に迫られるようになり、徐々に狩猟から飼育へと動物の利用法が変化していったことが知られている (藤井 2001)。

つまり、レディエーティング・パターンの移動はネアンデルタール人にもプロト・ユーラシアンにも同じように認められるが、ネアンデルタール人の場合には気候変動が激しい時期にも見られる上、比較的人口密度が低い状態に保たれていたのに対し、プロト・ユーラシアンの場合には気候が安定している時期に見られ、そしてまた該当地域で農耕への移行など、文化形態の変化が生じている点が大きく異なっていると言える。

さて、フィンレイソン (Finlayson 2004) によれば、プロト・ユーラシアンとネアンデルタール人に見られる移住パターンの相違は両者の生態系における生存戦略の違いに帰することができ。ネアンデルタール人もプロト・ユーラシアンも共にマンモスなどの大型ほ乳類 (Megafauna) が徘徊するステップ地帯から鹿などが豊富に見られる寒帯森林地帯まで多様な地域に適応することができた (Patou-Mathis 2000)。しかしながら、プロト・ユーラシアンがまずステップ地帯に進出し、その後、森林地帯へと進出していったことと対照的に、ネアンデルタール人は早い時期から森林地帯へと適応していた。より開けたステップ地帯では、狩猟対象となる草食動物が草を求めて長距離を移動する。すると、それを追う狩猟採集集団も必然的に移動距離が長くなり、結果として同じ居住地に戻る回数が減少するという。このことから、プロト・ユーラシアン の定住性が一般に低い傾

向にあるということが説明されるのである。

しかしその一方で、一般的にプロト・ユーラシアンと比較してネアンデルタール人は特定の動物に狩猟対象を絞る傾向が見られる (Patou-Mathis 2000)。プロト・ユーラシアンが一般に魚介類、鳥類など多様な動植物を利用していたことと対照的に、ネアンデルタール人の場合には地域や時代を包括した全体としてみるとプロト・ユーラシアン並みのバリエーションがあるとはいえ、ある特定の時代、地域に限定すると、その狩猟対象となる動物はせいぜい数種類程度だったと考えられ (Patou-Mathis 2000)、またその対象となる動物は主として大型のほ乳類であると考えられる (Bocherens 2011)。つまり、ネアンデルタール人は種として様々な動植物の狩猟採集を行う能力を有し、しかも実際には非常に高い狩猟能力を持ちながら、食料の種類について極めて選択的であったと結論づけられる (Patou-Mathis 2000)。ステップ気候では森林と比較して草食動物層が単調になりがちであると考えられるが、森林を好むネアンデルタール人の方が狩猟対象のレパートリーという点では少ないということは不可解にも思える。

最適採食理論 (Optimal Foraging Theory) は狩猟採集民族の行動パターンを分析する上で有力なツールとなる理論であるが、そこでは以下に概説するように、獲物となる種の数や狩猟環境の善し悪しを判断する材料となるということが示されている (Smith 1983)。この観点から考察するならば、獲物の種類が比較的限定されていたネアンデルタール人の狩猟戦略は、優先的に狩猟される動物 (high-ranked item) が比較的豊富な環境に彼らが暮らしており、優先順位の低い獲物を狩猟する必要性があまりなかったことを示しているといえるだろう。換言するならば、ネアンデルタール人は比較的定住性が強かったにもかかわらず、彼らの居住する地域で動物種の減少が顕著に現れなかったということである。通常、定住性が強ければ強いほど、周囲の環境の悪化を招くと考えられるため、このような戦略を継続的にとり続けることのできたネアンデルタール人の狩猟集団が周囲の生態系に与える影響は非常に少なかったと推論できる。

これと対照的にプロト・ユーラシアンは広範囲の動植物を利用していたのであり、このことは彼らの狩猟環境が決して恵まれたものではなかったことを意味していると考えられる。従来、このことはプロト・ユーラシアンが狩猟能力が高く、陸上、水中を問わず多様な動物を狩猟対象としてきたことを意味していると考えられてきた。換言するならば、プロト・ユーラシアンにとっては獲物がよりどりみどりだったということになる。しかしながら、最適採食理論が示唆することはまったく逆であると言ってもよい。

狩猟において優先順位の低い対象 (low-ranked item) が狩猟されるかどうかの選択は、それらの動物の狩猟可能性⁴には影響されず、むしろ優先的に狩猟される動物の狩猟可能性に影響されると考えられている (Smith 1983)。つまり、優先的に狩猟される動物と遭遇する機会が少なくなった時⁵に狩猟対象となる動物種が増えるのであり、これはすなわち狩猟環境が悪化している状態であると換言できるだろう。

また、近年ネアンデルタール人についての研究が進み、その認知能力、言語能力、狩猟能力などがプロト・ユーラシアンと比較して、決して遜色のないものであることが明らかになってきた。地中海沿岸域に生息していたネアンデルタール人については魚介類の他、海洋性ほ乳類などの水棲動物を利用していたことも知られており (Finlayson 2004, Stinger et al. 2008)、ネアンデルタール人の狩猟能力が低かったために水棲動物をあまり利用しなかったと考えることには無理がある。

また、プロト・ユーラシアン形成以前のホモ・サピエンスについては、魚介類の利用やシンボリックな行動など、旧来ネアンデルタール人と「ホモ・サピエンス」⁶を分つとされていた行動パターンの記録はあるものの、その頻度はプロト・ユーラシアンのもので比較すると著しく少ない。よって、プロト・ユーラシアンが形成された後、魚介類の利用など、後期旧石器文化を特徴づける文化の発達が本格化していったのであり、このことはプロト・ユーラシアンが居住する地域で生態系が大きく変化していったことと関連づけて考えるべきであるように思われる。

プロト・ユーラシアンが自らの狩猟環境を悪化させる傾向があったことを考慮すると、プロト・ユーラシアンがユーラシア大陸各地や、オーストラリア大陸、南北アメリカ大陸へと拡散していく過程で生じた大型ほ乳類の大量絶滅の理解が容易になる。これらの地域では例外なくプロト・ユーラシアンの侵入とともに数多くの大型ほ乳類が絶滅しており、その割合を大陸別に見ていくと、オーストラリア大陸の86%⁷に次いで南米大陸が80%に達し、さらに北米大陸が73%で続く。また絶滅した種の数でも南米大陸が46種、北米大陸が33種と他を圧倒している（図1参照）。

現時点で、プロト・ユーラシアンが環境に対して過度の負担となっていたという十分な証拠はないという見解（Finlayson 2004）はそれ自体正しいが、これは時空上で流動的に推移する環境の動態について、非常に視野を狭めた見方である。問題は、特定の時期に特定の地域でプロト・ユーラシアンが特定の動物種を狩猟し尽くしたということではなく、プロト・ユーラシアンの狩猟採集社会が環境に対して与える圧力が、大型ほ乳類の個体数の回復を許さなかったという点にあると考えられる。

つまり、大型ほ乳類の絶滅にプロト・ユーラシアンが関わっていると言う時、それは大型ほ乳類の群が最後の一頭までプロト・ユーラシアンによって狩猟され尽くされたということの主

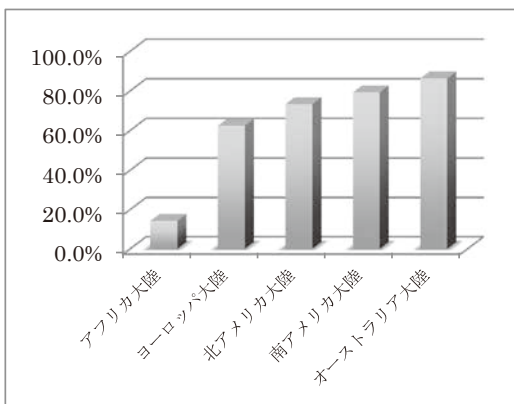


図1 過去10万年に絶滅した陸生大型ほ乳類 (megafauna) 種の割合: Wroe et al. 2004を基に作成

張しているのではなく、そもそもこれらの大型ほ乳類が更新世末期に減少した主要因がプロト・ユーラシアンによる狩猟だと主張しているわけでもない⁸。むしろ、大きな集団サイズを維持するためにプロト・ユーラシアンが獲物をえり好みしなくなるという傾向が見られ、そしてその結果として、大型ほ乳類の適応度が狩猟者である該当地域に居住するプロト・ユーラシアンの分布密度に依存しなくなったと考えられることが問題なのである。これは、大型ほ乳類の個体数が一度減少してしまうと、プロト・ユーラシアンの影響下ではその個体数を回復することが非常に困難になるということの意味している⁹。

別の観点から見てみると、非常に幅広い狩猟対象動物のスペクトラムをもつプロト・ユーラシアンは、言うならば生態ピラミッドで本来高次の捕食者が占有している上方の狭い領域を拡張してしまったと解釈することもできる。これによって、プロト・ユーラシアンが居住する地域では「ウサギがカメに勝つ¹⁰」ことになったと考えられるのである。

4. プロト・ユーラシアンの新大陸進出

さて、プロト・ユーラシアンがユーラシア北部に広がるステップに進出した後、どのような過程で拡散したかについては、前述のように未だ結論が得られていない。しかしながら、プロト・ユーラシアンの狩猟採集集団がシベリアから南北アメリカ大陸にも拡散していったことはほぼ確実であると考えてよいだろう。そして、そこで大型ほ乳類の絶滅劇が繰り返されるわけであるが、それは他の大陸で生じた絶滅劇よりも遥かに凄惨なものであったと考えられる。

今日では北米にヘラジカ (*Alces alces*)、トナカイ (*Rangifer tarandus*)、アメリカ・バイソン (*Bison bison*) などの大型草食動物が現存しているが、プロト・ユーラシアンの進出以前には、ケナガマンモス (*Mammuthus primigenius*) やコロンビアマンモス (*Mammuthus columbi*) をはじめとして、カメロプス (*Camelops* sp.) のようなラクダ科、ジャイアントバイソン (*Bison latifrons*) のようなウシ科、メガロニクス (*Megalonyx* sp.) のような地上性ナマケモノの仲間、ドエディク

ルス (*Doedicurus* sp.) のようなアルマジロの仲間と多彩な草食性ほ乳類が生息していた。この複雑で豊かな大型ほ乳類によって構成される生態系が、数千年程度という地質学的には比較的短い期間に、北米だけでなく南米でも姿を消したのである。

この頃はヤンガードリアス期と重なる時期であり、非常に激しい気候変動に見舞われた時期でもあった。このことと大型ほ乳類の絶滅を関連づける研究も行われている。しかし、この生態系は数十万年から数百万年という長いスパンで比較的安定していたものであり、その間には寒冷な氷期と温暖な間氷期とが交互に訪れ、また非常に激しい気候変動を経験していた (Dawson 1996, Ditlevsen 1996, GRIP Members 1993)。絶滅の原因が単一の因子に求められるわけではない (Wroe et al. 2004) が、プロト・ユーラシアンによる圧力が絶滅の主要な原因の一つであるとする理論は、数理モデルが実際の動態をよく説明していることもあり (Alroy 2001)、広く受け入れられていると言えるだろう。

この頃、北米大陸ではクロヴィス文化が広く見られるようになった。時代としては較正年代で13,000年ほど前から12,600年ほど前までの時期であるが、遺跡は現在のアメリカ合衆国全域からメキシコにかけての広範囲に見られる。突如として非常に広範囲にわたる文化圏が出現していること、そしてまた、新大陸にプロト・ユーラシアンがようやく進出してきたばかりであるはずのこの時代に、既に南アメリカ大陸の南端から遺跡が出土していることなどから、本当にクロヴィス文化が新大陸最古の文化圏であるのかどうかという点については議論が絶えない。

もし、これ以前に人類が北米大陸の南部や南米大陸に足を踏み入れていたとすると、どのようにして当時北米大陸北部を覆っていたコルディレラ氷床やローレントイド氷床を乗り越え、あるいは迂回していったのか、そして、なぜ疑問の余地のない遺跡¹¹がほとんど発見されないのかという点について明らかにする必要がある。

その一方で、エクアドルや南米ではこれより若干後の時代、既に植物の栽培化が見られるようになっており (Hancock 2012, Piperno and

Stothert 2003)、新大陸でも旧大陸同様に、1万年ほど前から初期の定住社会が見られるという点が議論をさらに混沌としたものになっている。

いずれにしても、クロヴィス文化圏はマンモスを始めとする大型ほ乳類の狩猟を行っていたと考えられる狩猟採集文化圏であり、クロヴィス石器がマンモス、マストドン、絶滅種のバイソンといった大型ほ乳類の骨と相伴している。そのため、これらの大型ほ乳類の狩猟を行っていたことはほぼ間違いないと考えられるが、果たして本当に大型ほ乳類の狩猟に特化していたのかという点については議論があった。つまり、大型ほ乳類を集中的に狙う専門的狩猟採集社会としてのクロヴィス文化圏と、日頃は他の動物を狩猟対象としていたが、時折大型ほ乳類を狩猟対象に加える狩猟採集社会としてのクロヴィス文化圏についての議論である。しかし、この問題については、少なくともクロヴィス文化の遺跡の多くについては、大型ほ乳類の狩猟に特化していたという結論が得られている (Waguespack and Surovell 2003)。このことから、少なくともクロヴィス文化が見られた頃には、良好な狩猟環境が残っていたと考えられる。また、アリゾナ州のナコ遺跡で発見されたマンモスには最低でも8個のクロヴィス型尖頭器が刺さっていたし、マーレー・スプリングスでは50人から100人の人間が食べられるだけの11頭ものバイソンが屠殺されていた (Fagan 1987)。これらの事例から考えると、パレオ・インディアンとして知られる当時のプロト・ユーラシアンが比較的大規模な集団を形成して暮らしていたことが推測される。

クロヴィス狩猟民が本当に今日の「ネイティブ・アメリカン」の祖先であるかどうかという点についても議論が繰り広げられてきたが、近年、ゲノム解析からこの問題に光が当てられた (Rasmussen et al. 2014)。それによると、クロヴィス文化の遺跡から発掘された人骨のゲノムは今日のいかなる民族集団よりも「ネイティブ・アメリカン」に近く、クロヴィス文化の担い手が「ネイティブ・アメリカン」の祖先である蓋然性は極めて高いという。また、これらの人々がアジア起源であることも確認されている

(Dillehay 2003)。

プロト・ユーラシアンに進出当時、極めて多様な大型ほ乳類によって構成された生態系が南北両アメリカ大陸に広がっていたことは疑問の余地がない。そして、このような狩猟採集民族にとっては理想的な環境において、プロト・ユーラシアンが、その他の地域で多く見られるような多面的な狩猟戦略ではなく、特定の動物に特化した狩猟戦略をとったことも、最適採食理論が導き出す結果と一致しているし、議論の余地のあるオーストラリア大陸を除けば、世界的に見ても新大陸での大型ほ乳類の絶滅率が極めて高く、しかもそれがごく短期間に生じたことも明らかである。よって、更新世末期、新大陸の生態系にプロト・ユーラシアンが与えた影響は極めて甚大なものであったと結論づけざるを得ないのである。

農耕社会の出現やそれに続く都市文明の発達とともに、人類が環境に与える影響が大きくなってきたことは否定しようのない事実である。しかし、自然の中で自然と共に生きると考えられがちな狩猟採集民族もまた、環境に甚大な影響を与えていたこともまた事実なのである。狩猟採集民族が生きる「自然環境」そのものも、彼らが手を加えることによって作り出された生態系であると言ってよい。そして、そこには「ネイティブ・アメリカン」たちの祖となったと考えられるクロヴィス狩猟民も含まれるのである。「ネイティブ・アメリカン」の祖となったパレオ・インディアンは、プロト・ユーラシアンとして例外的であるどころか、むしろ典型的とも言える行動をとっていたと言える。

5. 新大陸における「狩猟採集民族」

クロヴィス文化と自然環境の相互作用がプロト・ユーラシアンの典型例であることを確認してきたが、この傾向はそれ以降も続いたのであろうか。そしてまた、それならばなぜ西洋社会は自然の中で生きるプリミティブな存在として「ネイティブ・アメリカン」をとらえていたのかという疑問が生じるだろう。「ネイティブ・アメリカン」が自然と共に生きる人々であるというイメージを接触当時から西洋社会に抱かれ

ていた理由の一つに、西洋社会との接触当時、「ネイティブ・アメリカン」の間では狩猟採集文化が一般的であり、北米から南米まで非常に広い範囲で見られたということが挙げられるだろう。これは牧畜と農耕の組み合わせによって、居住地の周囲から自然環境を遠ざける傾向があった西洋社会とは異なっているという印象さえ与えるだろうし、大型ほ乳類の絶滅を引き起こしたことは事実であるとしても、その後の環境利用については、あまり負担を与えない「自然にやさしい」社会を築き上げていたのではないだろうかという疑問も生じるだろう。そして、このことはコンキスタドールや宣教師たちがヨーロッパとアメリカの対比を文明と未開という文脈で認識するに至ったこととも無縁ではないのではないだろうか。

実際のところ、南北アメリカ大陸では15世紀から17世紀にかけて狩猟採集民族が多く見られたが、この原因は二つ考えられる。一つは新大陸の狩猟採集民族がベルウッド (Bellwood 2005) の言う「すきまニッチ」型の狩猟採集形態をとっていたと考えられることであり、いまひとつはヨーロッパからの移民がもたらした農耕社会の崩壊である。これら二点について、順を追って確認していく。

南北アメリカ大陸に進出したプロト・ユーラシアンは、当初は狩猟採集に基づく社会を形成していたと考えられるが、比較的早い時期に定住性を強めていった。エクアドルではカボチャが1万2千年ほど前から栽培されるようになったと考えられるが (Piperno and Stothert 2003)、これは疑問の余地なく北米にプロト・ユーラシアンが到達していた時期とほぼ等しい。また、メキシコのオアハカにあるギラ・ナキツ遺跡でも1万年前のものとするカボチャの種子が発見されている (Flannery 1986)。

これらの植物の栽培化がすぐに集約的農耕へと結びついたわけではない (Bellwood 2005) が、南北アメリカ大陸では、人口密度が低かったと考えられるプロト・ユーラシアンによる入植の黎明期から、ある程度の定住性が見られるという点でユーラシア大陸とは異なっている。

おそらく、南北アメリカ大陸での大型ほ乳類

の絶滅率があまりにも高かったことが影響していると考えられるが、これらの地域ではアンデスなどの例外を除いて動物の家畜化がほとんど見られなかった。新大陸の多くの地域で、動物性タンパク質の供給源を主として狩猟採集活動に依存していたと考えられるのである。つまり、新大陸では「すきまニッチ」型の狩猟採集 (Bellwood 2005) を行う集団が生み出されていたと考えられる。

「すきまニッチ」型狩猟採集民族とは、周囲の農耕民族を含む経済システムに取り込まれ、肉や毛皮を流通させることを目的とした狩猟採集民族であり、ベルウッドは、彼らが農耕という戦略を採用することを妨げられていると主張し、フィリピンの狩猟採集民族であるアグタやバタクを例に挙げて次のように述べている。

アグタやバタクは農耕を確実に遂行するための技術が欠けているばかりでなく、彼ら自身が農耕技術を学ぼうとするときですら、周囲の栽培民や商品作物生産者は耕作をおこなうことをゆるさない。(Bellwood, 2005, p44)

16世紀から18世紀にかけて、「ネイティブ・アメリカン」の社会には、「すきまニッチ」型狩猟の他に、もう一つ狩猟採集文化を必要とする要素があった。それはヨーロッパから来た人々がもたらした様々な疫病である。16世紀に今日のアメリカ合衆国南東部を探検したエルナンド・デ・ソトはミシシッピ川流域に数多くの町を目撃している (Clayton et al. 1993) が、その百年後に同じ地域を旅したラ・サールはこの地域がほとんど人の住まない空白地帯となっていることを見出した (Mann 2005)。西洋社会と接触した後、比較的短期間のうちに農村社会が崩壊したことが、「ネイティブ・アメリカン」と狩猟採集文化を結びつける理由となっていると考えられる。

ヨーロッパとの接触以前、新大陸の人口がどの程度の規模であったのかという問題は未だ解き明かされてはいない。しかしながらトウモロコシ、カボチャ、ヒマワリ、トマト、ジャガイモ、インゲン豆といった様々な有用な作物を生み出

した新大陸の農耕文化は、北米ではカホキアに代表されるミシシッピ文化やアメリカ南西部に花開いたプエブロ文化、中米ではラ・ベンタなどの巨大な祭司センター／都市を擁するオルメカ文化やその後に発展したマヤやアステカといった荘厳な都市国家、そして南米ではインカ帝国に代表されるアンデス地域の諸文化など、文明と呼び得る高度に発達した諸文化を生み出していた (Weaver 1993)。プレ・コロンブス時代の新大陸に発達した様々な都市の中でも最大級のものとなるテオティワカンも20平方キロメートルにも及び、8万人から10万人にも達する規模の人々が生活していたと考えられる。テオティワカンの周囲15キロメートル以内の地域にはこの大都市を支えるための農地が広がっていたと考えられるし、テオティワカンの近くを流れるサン・ファン川はその流れを人工的に変えられていた (Weaver 1993)。これらの地域では人の手による土地の造成や原材料となる鉱物の採掘など、自然環境が大きく改変されていた痕跡が多数残されている。

さらに、アマゾン川流域など、これまであまり考古学の対象とならなかった地域でも発達した社会が形成されていたという証拠が提示されるようになってきている (Ames 1981, Ambrose et al. 2003, Iriarte et al. 2004, Mann 2005)。つまり、新大陸では農耕が一般化しており、農産物に支えられた都市社会も非常に広い範囲で見られたと考えられるのである。

さて、実際に農耕を基盤とした都市社会が崩壊していく様子がヨーロッパの記録に克明に残されているものと言えば、黄金へと殺到したピサロの部隊が記録に残したインカ帝国や、コルテスの部隊によって崩壊することとなったアステカの水上都市テノチティランのように限られたものしかないが、これらの地域では天然痘などヨーロッパ由来の疫病が猛威を振るったことが知られている (Fisher et al. 2003, Diamond 1997, Mann 2005)。他の地域では有用な史的記録がほとんど残されていない以上、これらの地域で農耕社会が崩壊した理由は考古学的資料から推測することになる。しかし、伝染病が他の地域でも猛威を振るっていたことは確実視され

るようになってきている (Patterson and Runge 2002)。

15世紀頃までに新大陸には農耕社会が一般化し、各地で定住型の村落が見られるようになっていたことは、マウンドの発掘調査によって明らかにされてきたカホキアの社会規模などを考慮しても、ほぼ確実と言えるであろう。その定住社会をつなぐ交易ネットワークも見られるようになっており、これが都市や大規模な村落を支えていた。実際のところ、ピューリタンが最初に新大陸へ渡ってきた頃には、上陸して村を築くことも困難であったという。そして、そのような人口の増加が複雑な階級社会を形成し、環境破壊を通じて自己崩壊へと至ったケースも少なくなかったと思われる (Woods 2004)。

しかし、おそらくはヨーロッパからもたらされた疫病が全てを一変させてしまった。風疹や天然痘など、旧大陸で猛威を振るった伝染病が、一度に「ネイティブ・アメリカン」に襲いかかった時、これらの病気に接したことがなく、免疫もなかった人々に与えた被害の大きさは想像を絶する。接触前の人口がどの程度のものであったかについては諸説があって断定にはほど遠い状況であるが、これらの疫病を含む過酷な歴史を乗り越えた生存者の割合は、多く見積もっても50%、少ない見積もりでは2%とも言われる (Stannard 1990)。

ヨーロッパからもたらされた伝染病は、繰り返し「ネイティブ・アメリカン」の社会に襲いかかったと考えられている。人々を豊かにしていた交易網が伝染病の感染を広める役割を果たし、定住社会はみるみる姿を消していった。その結果として、ヨーロッパからの入植が本格化し始めた時、狩猟採集によって生き延びる部族が点在する広大な未開の土地が彼らの前に広がっているように思われたのであろう。「ネイティブ・アメリカン」を狩猟採集社会と結びつける傾向はこのようにして強化されていったと考えられる。そして北米では急速に弱体化する部族の勢力を保つために、ヨーロッパからもたらされた銃が羨望的的となり、次いでヨーロッパからの移民を招き入れることになったし、「ネイティブ・アメリカン」同士の抗争のためにヨ

ーロッパ人や銃が利用されることも少なくはなかった (Mann 2005)。

ヨーロッパの「新大陸発見」に伴って「ネイティブ・アメリカン」が様々な形で暴力の犠牲になったことを過小評価することは許されるべきではない。ラス・カサスの記録から、19世紀に生じたヤヒ族に対する襲撃事件まで、このような暴力については様々な記録が残されている。しかし、そこから「ネイティブ・アメリカン」が西洋社会の犠牲になった、自然と共に生きる無垢な人々であるというイメージを紡ぎ出すことは論理的であるとは言えない。少なくとも「ネイティブ・アメリカン」が環境の改変をおこなっていたこと、そして時にはそれが定住社会の崩壊をもたらしていたという点については旧大陸と何ら変わることはないし、西洋人の入植とともに「ネイティブ・アメリカン」の社会が崩壊していく中で、彼らが自然環境の守護者として振る舞っていたわけでもない。むしろ、彼らは生存をかけて、時として西洋人に協力し、あるいはその文化や社会を受け入れ、また時には西洋人と対峙しながら闘ったのである。その影響は非常に大きく、今日でもネイティブ・アメリカンを文化的、歴史的トラウマが苛んでいるとも言われる (Struthers and Lowe 2003)。

「高貴なる野蛮人」は、崩壊した「ネイティブ・アメリカン」の社会を垣間みた西洋社会が構築した幻想でしかなく、プロト・ユーラシアンによる環境破壊の洗礼を受けたという点では、新大陸も旧大陸と変わることはないと考えられる。15世紀以降にヨーロッパが新大陸に何をもたらしたものと問うならば、それはより高度な技術によってその破壊の度合いを一気に押し進めたという点にあると言えるだろう。

6. おわりに：「ネイティブ・アメリカン」というイメージの功罪

自然と共に生きる「ネイティブ・アメリカン」というイメージは、今日でも「ネイティブ・アメリカン」を苛んでいる。

一例を挙げるのであれば、1999年にニーベイ (Neah Bay) で「ネイティブ・アメリカン」のマカ族 (the Makah tribe) がコククジラの捕鯨を

行った際、シーシェパードなどの環境保護団体が強く反発した (Coté 2010)。マカ族は捕鯨が伝統文化の一部であること、アメリカ合衆国との間に捕鯨を認める協定が結ばれていることなどを根拠として捕鯨を行ったのであるが、これに対して火器やモーターボートなど現代文明がもたらした様々な技術を用いた捕鯨が果たして伝統文化と言えるのかという反論が展開された。

コテ (Coté 2010) は「ネイティブ・アメリカン」にいかなる主観的ステレオタイプを適用することも間違っており、「ネイティブ・アメリカン」もまた、様々な形で文化的、社会的な環境にあわせて変容をとげつつある民族集団の集合体であると論じている。実際のところ、コテは「ネイティブ・アメリカン」を周囲の環境に適合し、自然と共生する人々とみなすステレオタイプ化は、近年のアメリカ社会に広く見られるようになったと言うが、そこには環境意識の高まりにつれて自己を含む現代社会へのアンチテーゼが必要とされているという、現代社会側の都合が見え隠れしている。

その一方で、「ネイティブ・アメリカン」自身が、「自然にやさしく生きる人々」というイメージを観光産業に利用しているという側面もある。一例を挙げるならば、ワシントン州のシアトルではブレイク島にこういったイメージを利用したティリカム・ヴィレッジ (Tillicum Village) という観光施設を設け、島までのクルーズを観光客向けに売り出している。そこでは映像と「ネイティブ・アメリカン」によるダンスを融合したショーが行われ、アメリカ全土から集まる観光客たちにひとときの娯楽を提供している。しかし、美しく飾られたトーテムポールの散在するティリカム・ヴィレッジは、あくまでも観光施設であり、それ自体、かつてシアトル近郊に見られた「ネイティブ・アメリカン」の村を歴史的資料として再現したものではない。それはあたかも、ディズニースタートのシンデレラ城は中世ヨーロッパの城を再現したものであると誤解するようなものである。

本稿で議論してきたように、これらの現象の根底にある「ネイティブ・アメリカン」のイメージについては疑問の余地がある。プロト・ユ

ラシアンの拡散は環境の破壊を伴い、その点では新大陸も旧大陸も変わるところがない。プロト・ユーラシアンは、ほぼ例外なく環境を改変しながら生きてきたと言える。

この点からも、「ネイティブ・アメリカン」を自然と結びつけ、環境保全運動に利用することは避けるべきではないだろうかと思われる。羊が草を食むイギリスの牧歌的な農村風景や、リスが駆け回るアメリカの公園、そして日本の里山も、人工的な自然という意味では等価である。これらの風景は、それぞれが人類と自然との相互作用の中でたどり着いた一種の定常状態であると言えるだろう。環境問題について考える時、我々が今日問わなければならないのは、我々の社会を成立させながらいかにしてより恒常的な定常状態を築くかという点にあり、それは決して「ネイティブ・アメリカン」のイメージを利用することと同義ではないと思えるのである。

参考文献

1. Alroy, J. (2001). A Multispecies Overkill Simulation of the End-Pleistocene Megafaunal Mass Extinction. *Science*, 292, 1893-1896. doi: 10.1126/science.1059342.
2. Ambrose, S. H., J. Buikstra, and H. W. Krueger. (2003). Status and Gender Differences in Diet at Mound 72, Cahokia, Revealed by Isotopic Analysis of Bone. *Journal of Anthropological Archaeology*, 22, 217-226.
3. Ames, K. M. (1981) The Evolution of Social Ranking on the Northwest Coast of North America. *American Antiquity*, 46(4), 789-805.
4. Amos, W. and A. Manica. (2006). Global Genetic Positioning: Evidence for Early Human Population Centers in Coastal Habitats. *PNAS*, 103(3), 820-824.
5. Bellwood, P. (2005). *First Farmers: The Origins of Agricultural Societies*. Wiley-Blackwell. (ベルウッド P. (2012). 長田俊樹・佐藤洋一郎 (監訳) 『農耕起源の人類史』 京都大学学術出版会)
6. Bocherens, H. (2011). Diet and Ecology of Neanderthals: Implications from C and N isotopes: Insights from Bone and Tooth Biogeochemistry. N. J. Conard and J. Richter (Eds.), *Neanderthal Lifeways, Subsistence and Technology: One Hundred Fifty Years of Neanderthal Study*. Springer.

7. Callaway, E. (2015). Neanderthals Gain Human Neighbour: Cranium Discovery Shows That *Homo sapiens* Was Living in Middle East 55,000 Years Ago. *Nature*, 517, 514. doi:10.1038/517541a.
8. Clayton, L. A., V. J. K. Knight Jr., and E. C. Moore, (Eds.) (1993). *The De Soto Chronicles: The Expedition of Hernando de Soto to North American in 1539-1543*. 2 vols. University of Alabama Press.
9. Conard, N. J. (2011). The Demise of the Neanderthal Cultural Niche and the Beginning of the Upper Paleolithic in Southwestern Germany. N. J. Conard and J. Richter (Eds.), *Neanderthal Lifeways, Subsistence and Technology: One Hundred Fifty Years of Neanderthal Study*. Springer.
10. Coté, C. (2010). *Spirits of Our Whaling Ancestors: Revitalizing Makah & Nuu-chah-nulth Traditions*. University of Washington Press.
11. Currat, M. and L. Excoffier. (2004) Modern Humans Did Not Admix with Neanderthals during Their Range Expansion into Europe. *PLoS Biology*, 2, 12, e421.
12. Dawson, A. G. (1996). *Ice Age Earth: Late Quaternary Geology and Climate*. Routledge.
13. Diamond, J. (1997). *Guns, Germs, and Steel: The Fate of Human Societies*. W. W. Norton & Company. (ダイアモンド J 倉骨彰 (訳) (2008) 『銃・病原菌・鉄』 草思社)
14. Dillehay, T. D. (2003). Tracking the First Americans. *Nature*, 425, 23-24.
15. Ditlevsen, P. D., H. Svensmark, and S. Johnsen. (1996). Contrasting Atmospheric and Climate Dynamics of the Last-Glacial and Holocene Periods. *Nature*, 379, 810-812.
16. Fagan, B. M. (1987). *The Great Journey: The Peopling of Ancient America*. Thames and Hadson. (フェイガン B.M. 河合信和 (訳) (1990) 『アメリカの起源』 どうぶつ社)
17. Finlayson, Clive. (2004). *Neanderthals and Modern Humans*. Cambridge University Press.
18. Fisher, C. T., H. P. Pollard, I. Israde-Alcantara, V. H. Garduno-Monroy, and S. K. Banerjee. (2003). A Reexamination of Human-Induced Environmental Change within the Lake Patzcuaro Basin, Michoacan, Mexico. *PNAS*, 100(8), 4957-4962.
19. Flannery, K. E. ed. (1986). *Guila Naquitz*. Orlando:Academic.
20. Fu, Q. et al. (2014). Genome Sequence of a 45,000-year-old Modern Human from Western Siberia. *Nature*, 514, 445-449. doi:10.1038/nature13810.
21. Goebel, T., M. R. Waters, M. Dikova. (2003). The Archaeology of Ushki Lake, Kamchatka, and the Pleistocene Peopling of the Americas. *Science*, 301, 501-505.
22. Green, R. E. et al. (2010). A Draft Sequence of the Neanderthal Genome. *Science*, 328, 710-722. doi: 10.126/science.1188021.
23. Greenland Ice-Core Project (GRIP) Members. (1993) Climate Instability During the Last Interglacial Period Recorded in the GRIP Ice Core. *Nature*, 364, 203-207.
24. Hancock, J. F. (2012) *Plant Evolution and the Origin of Crop Species, 3rd Edition*. CABI.
25. Iriarte, J, I. Holst, O. Marozzi, C. Listopad, E. Alonso, A. Rinderknecht and J. Montaña. (2004). Evidence for Cultivar Adoption and Emerging Complexity during the Mid-Holocene in the La Plata Basin. *Nature*, 432(2), 614-617.
26. Las Casas, B. (1552). *Brevísima Relación de la Destrucción de las Indias* (ラス・カサス 染田秀藤 (訳) (2013) 『インディアスの破壊についての簡潔な報告』 岩波文庫)
27. Lieberman, D. E. (1993). The Rise and Fall of Seasonal Mobility among Hunter-Gatherers: The Case Study of the Southern Levant. *Current Anthropology*, 34(5), 599-631.
28. Lynch, T. F. (1990). Glacial-age Man in South America?: A Critical Review. *American Antiquity*, 55(1), 12-36.
29. Mann, C. C. (2005). *1491: New revelations of the Americas before Columbus*. Vintage. (マン C.C. 布施由紀子 (訳) (2008) 『1491: 先コロンブス期アメリカ大陸をめぐる新発見』 日本放送出版協会)
30. Neves, A. G. M. and M. Serva. (2012). Extremely Rare Interbreeding Events Can Explain Neanderthal DNA in Living Humans. *PLoS ONE* 7(10): e47076. doi:10.1371/journal.pone.0047076.
31. Patou-Mathis, M. (2000). Neanderthal Subsistence Behaviours in Europe. *International Journal of Osteoarchaeology*, 10, 379-395.
32. Patterson, K. B. and Runge. (2002). Smallpox and the Native Americans. *American Journal of the Medical Sciences*, 323, 216-222.
33. Piperno, D. R. and K. E. Stothert. (2003). Phytolith Evidence for Early Holocene *Cucurbita* Domestication in Southwest Ecuador. *Science*, 299, 1054-1057.

34. Rasmussen, M. et al. (2014). The Genome of a Late Pleistocene Human from a Clovis Burial Site in Western Montana. *Nature*, 506, 225-229. doi: 10.1038/nature13025.
35. Rowe, M. W. and K. L. Steelman. (2003). Comment on "Some Evidence of a Date of First Humans to Arrive in Brazil". *Journal of Archaeological Science*, 30, 1349-1351.
36. Santos, G. M., M. I. Bird, F. Parenti, L. K. Fifield, N. Guidon, and P. A. Hausladen. (2003). A Revised Chronology of the Lowest Occupation Layer of Pedra Furada Rock Shelter, Piauí, Brazil: The Pleistocene Peopling of the Americas. *Quaternary Science Review*, 22, 2303-2310.
37. Smith, E. A. (1983). Anthropological Application of Optimal Foraging Theory: A Critical Review. *Current Anthropology*, 24(5), 625-651.
38. Stanard, D. E. (1990). Disease and Infertility: a New Look at the Demographic Collapse of Native Populations in the Wake of Western Contact. *Journal of American Studies*, 24(3), 325-350. doi: 10.1017/S0021875800033661.
39. Stiner, M. C., N. D. Munro, and T. A. Surovell. (2000). The Tortoise and the Hare: Small-Game Use, the Broad-Spectrum Revolution, and Paleolithic Demography. *Current Anthropology*, 41(1), 39-79.
40. Stinger, C. B. et al. (2008). Neanderthal Exploitation of Marine Mammals in Gibraltar. *PNAS*, 105(38), 14319-14324. doi: 10.1073/pnas.0805474105.
41. Struthers, R. and J. Rowe. (2003). Nursing in the Native American Culture and Historical Trauma. *Issues in Mental Health Nursing*, 24, 257-272.
42. Waguespack, N. M. and T. A. Surovell. (2003). Clovis Hunting Strategies, or How to Make Out on Plentiful Resources. *American Antiquity*, 68(2), 333-352.
43. Weaver, M. P. (1993). *The Aztecs, Maya, and Their Predecessors: Archaeology of Mesoamerica*. Academic Press.
44. Woods, W. I. (2004). Population Nucleation, Intensive Agriculture, and Environmental Degradation: The Cahokia Example. *Agriculture and Human Values*, 21, 255-261.
45. Wroe, S., J. Field, R. Fullagar, and L. S. Jermin. (2004). Megafaunal Extinction in the Late Quaternary and the Global Overkill Hypothesis. *Alcheringa: Am Australian Journal of Palaeontology*, 28(1), 291-331.
46. 海部陽介 (2005) 『人類がたどってきた道：“文化の多様化”の起源を探る』 日本放送出版協会
47. 鎌田遵 (2009) 『ネイティブ・アメリカン：先住民社会の現在』 岩波書店
48. 藤井純男 (2001) 『ムギとヒッジの考古学』 同成社
49. 山本明歩 (2004) 「気候変動と定住化—農耕へ至るアプローチ—」『科学／人間』 No.34 pp.175-187 関東学院大学工学部教養学会
50. 山本明歩 (2005) 「GISP2のデータに見る気候変動と農耕起源」『科学／人間』 No.35 pp.111-126 関東学院大学工学部教養学会
51. 山本明歩 (2013) 「アナバプティストの多様性」『総合社会学部研究報告』 第15集 pp.11-26 京都文教大学



Tillicum Villageの風景

(Endnotes)

- 1 ここでの「ネイティブ・アメリカン」は西洋社会による「新大陸発見」以前にこの地に居住していた人々、及びその子孫として公的に認められている人々を指すが、その言葉の本来の定義上は、南北アメリカ大陸で生まれたあらゆる人々を含むこともあり、ネイティブ・アメリカン自身にはあまり好まれない表現である。また、その範囲が極めて不明瞭であるため、本稿では便宜上設ける暫定的な概念であるという意味を込めて「ネイティブ・アメリカン」という表現を用いたい。
- 2 海部はこの説についてその著作(2005)でも言及しているが、第68回日本人類学会のシンポジウムでも主張している。沿岸部移動説についてはAmos and Manica (2006)等を参照のこと。
- 3 ここで絶滅と表現しているのはネアンデルタール人の人骨や住居跡などの遺跡が見られなくなる

現象であり、必ずしもネアンデルタール人が死に絶えたということではない。プロト・ユーラシアン形成後もネアンデルタール人の集団がプロト・ユーラシアンに吸収された可能性はある。しかしながら、ヨーロッパでプロト・ユーラシアンとネアンデルタール人が接触していたことを示す考古学的証拠は乏しく、末期のネアンデルタール人が集団として絶滅したという可能性は十分にある。

- 4 ここでいう「狩猟可能性」を厳密に定義するならば、それは最適採食理論で“encounter rate”と呼ばれるものであり、狩猟可能な獲物に遭遇する機会である。あるいは「狩猟の機会」と呼ぶべきかもしれないが、ある動物に遭遇したとしても、それが狩猟可能でなければこの指数は0となると考えられるため、「狩猟可能性」とした。
- 5 一般的には、これはその動物種の個体数が減少した場合だと考えてよい。
- 6 ここで言う「ホモ・サピエンス」は、ヨーロッパ後期旧石器文化の担い手のことであり、本稿の定義ではプロト・ユーラシアンと同義である。
- 7 オーストラリア大陸については、プロト・ユーラシアンの到達以前に大型ほ乳類が多数種絶滅している可能性があり、プロト・ユーラシアンが関与したと考えられる絶滅種はこれよりも少なくなる可能性がある。

8 無論、これまで議論されてきた通り、大型ほ乳類の減少そのものの直接的な要因がプロト・ユーラシアンでの狩猟あるという可能性を否定するものではない。

- 9 通常であれば、獲物の個体数が減少すればそれによって捕食者の個体数も減少する。それによって、今度は獲物の個体数が再び増加する（つまりは獲物の適応度が捕食者の個体数、あるいはより正確には遭遇頻度に依存する）のであるが、このメカニズムがプロト・ユーラシアンについては作用しなかった可能性が高いということである。
- 10 ウサギは素早く、繁殖率が高い。対してカメは動きが遅く、また繁殖率も低い。イソップ童話をもじったスティナーの論文 (Stiner et al. 2000) を参照のこと。
- 11 「疑問の余地のある」遺跡の例はいくつか報告されている。例えば、サンタ・ローザ島では、3万7千年前のものとされる焼かれたコビトマンモスの骨片が発見されているが、石器などが一切発見されておらず、野火で焼かれたマンモスの死体なのではないかと疑われている。

Abstract

Native Americans as a Branch of “Proto-Eurasians”

YAMAMOTO, Akiho

Native Americans are often associated with the image of people who live in harmony with nature. Although Native Americans sometimes acknowledge this image, they also seem to suffer from the image. In order to discuss the legitimacy of such image, this paper first defines “Proto-Eurasian” as a group of people who migrated out of Africa and interbred with other populations such as Neanderthals and Denisovans. Proto-Eurasians quickly spread to other continents such as Europe, Asia, and Australia where extinctions of large mammals followed the waves of human migration. Although the actual reason behind those extinctions are still controversial, this paper argues that group size of Proto-Eurasian foragers was the major contributor of the extinctions and that North America and South America were no exceptions. This paper then discusses that “the natural environment” is more or less formed under the influence of human interactions with the surrounding environment and questions the image of Native Americans as living guardians of natural environment.